

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 1日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520187

研究課題名（和文） 奈良・平安初期漢文書簡に見る敦煌書儀・尺牘表現受容の史的展開

研究課題名（英文） A Historical Study on the Acceptance of Expressions in the Letters Written in Classical Chinese in the Earlier Heian Period.

研究代表者

西 一夫 (NISHI KAZUO)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：20422701

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、奈良・平安朝初期の漢文書簡を基礎資料として、中国文学からの表現受容の実態を明らかにしようとしたものである。

以上のような課題意識から導かれた成果として、以下の4点が挙げられる。

- ① 空海の漢文書簡の特徴的な表現が同時代人と較べて豊かであること。
- ② 私家版として作成した語彙索引と本文の校訂をほぼ終えた。
- ③ 従来見落とされてきた新たな書簡内容を明らかにできた。
- ④ 表現受容の実態と空海独自の表現形成を奈良時代資料との関連から跡づけた。

研究成果の概要（英文）：This research task tends to clarify the actual condition of expression acceptance from Chinese literature by using the Chinese writing letter in early stages of Nara and Earlier Heian as underlying data.

The following four points are mentioned as a result drawn from the above subject consciousness.

- ① A characteristic expression of Kuukai's Chinese writing letter be rich compared with a contemporary.
- ② Revision of the glossarial index created as a Private version and a revised text sentence was finished mostly.
- ③ The new contents of a letter overlooked conventionally were able to be clarified.
- ④ It is marks attachment た from relation with Nara period data about original expression formation of the actual condition of expression acceptance, and Kuukai.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：日本古典文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：漢文学

1. 研究開始当初の背景

奈良・平安初期は、文学史区分では二つの時代に亘るものの文学形成の観点から見れば、漢詩・漢文が貴族たちの教養の礎となり、豊かな成果を生み出した時代だと言える。平仮名ではなく漢字による文学的な営為を実現するには、中国文学に対する深い造詣が求められていた。そうした中国文学の受容には、海彼への使者(遣隋使・遣唐使)や留学生・留学僧が大きな役割を果たしている。そうした人物たちの一人であるの弘法大師空海(宝龜5[774]-承和2[835])は、奈良朝から平安初期へ展開する漢字を書記言語とする日本文化・文学に多大な影響を与えた。彼の主要な業績は、①宗教家・②書家・③文人に集約できる。いずれもが中国の文化・文学を基盤として成り立ち、それを前提とした研究が積み重ねられて大きな成果を挙げている。

そうした三分野の研究に共通して取り上げられる基礎資料とも称すべきなのが『高野雑筆集』(上下巻)に収められている書簡である。これらは現在96通が知られている。これらの書簡資料は、従来の研究ではあくまで補助的な資料として位置付けられ、主たる対象となっていない状況に置かれてきた。数度にわたる全集の刊行(弘法大師全集[1910年~]、弘法大師著作全集[1968年~]、弘法大師空海全集[1983年~]、定本弘法大師全集[1991年~])では書簡が採録されながらも、中心は仏教文献にあった。これらと平行して索引の整備や詳細な研究と注釈が進展する中で、書簡は索引等の整備も行われてない現状にある。

このような状況に対して、申請者は2年間(平成19~20年度)の研究補助金(基盤研究(C))によって「(仮称)『高野雑筆集』語彙集成」の作成におおよその見通しを付けた。この語彙集成作成の過程において、『高野雑筆集』の書簡語彙の多くが敦煌文書の書儀や六朝の尺牘に見られる語彙と密接な関係にあることが明らかになってきた。しかも敦煌文書や六朝尺牘の表現と密接に関わるのは、奈良朝の書簡表現にも同様に指摘できる現象なのである。このように奈良朝から平安初期の書簡表現が、敦煌書儀や尺牘表現をどのように受容しているのかを見通すことは、これまでの受容研究や比較研究では取り上げられることのない領域であると位置づけられる。

2. 研究の目的

上記のような背景をなしている理由には、以下の3点に集約できる。

- (1) 敦煌文書の資料整備と書儀研究の遅れ
- (2) 受容研究の対象として書簡表現が取り上げられる機会が少ない

(3) 奈良朝後期の書簡資料が表現研究の対象とされる機会が少ない

第1については、文書発見から百年が経ち、近年漸く中国(俄蔵敦煌文献、国家図書館蔵敦煌書)・英国(英蔵敦煌社会歴史文献釋録)を中心に書簡の整備が様々な形で進行している。その成果を活用した研究成果(趙和平『敦煌写本書儀研究』1993、同『敦煌表状箋啓書儀輯校』1997、張小豔『敦煌書儀語言研究』2007等)も刊行されている。

第2については、空海の書簡では書かれている事実を明らかにし(歴史研究分野)、書式の分析から社会制度の実態を把握する(制度史分野)ことに主眼が置かれてきたことに要因がある。しかも空海の書簡に対しての研究は、仏教学の立場から行われることが多く、宗教家空海の事跡研究にとどまっていると言わざるをえない。つまり空海の書簡研究(高木神元『弘法大師の書簡』1981)はこれらの研究分野の補助資料として扱われることが多かったのである。

第3については、書簡(文書)を収める正倉院文書研究は史的事実の解明が中心であり、表現研究として書簡(文書)に考察を加えることが十分になされておらず、『萬葉集』の書簡も歌を解釈するためにのみ取り上げられ、書簡を対象とする成果は僅かであった。これらの諸問題に対して、近年、表現研究・文学研究の対象として取り上げた成果が出されている(古瀬奈津子「手紙のやりとり」2005等)。

急速な状況の改善のなかでも敦煌文書の公開と頒布が広く行われているのは大きな前進と位置づけられよう。これに伴い書儀研究が深められ、中国・日本両国の研究成果が刊行されて書儀・尺牘の領域として研究の蓄積が進行(中国:周一良・趙和平『唐五代書儀研究』1995、日本:丸山裕美子「書儀の受容について—正倉院文書にみる「書儀の世界」—」1996等)している。状況は正倉院文書も同様であり、特に奈良女子大学21世紀COEプログラム(古代日本形成の特質解明の研究教育拠点)による『正倉院文書の訓読と註釈—講義不詳編(一)(二)—』(2005、2007)は本研究課題と密接に関わる貴重な成果である。

以上のような本研究課題の基盤とも言える敦煌文書研究と正倉院文書研究の蓄積の進展は、重要な意味をもつ。つまり、奈良・平安初期の書簡表現に敦煌書儀と尺牘表現がどのように受容されているのかを、表現の史的展開に留意して跡づけることとなり、しかも文学史上「国風暗黒時代(漢風讚美時代)」と称される当該時期の解明につながることで期待されるからである。

本研究課題が受容史の観点から書簡表現に考察を行おうとするのは、二つの時代区分に亘る書簡資料が置かれている現状を見直し、書簡表現の内容をより深く理解して文学史研究を前進させると同時に、史的展

望に立って奈良朝から平安朝初期の中国文学受容の実態の一端を明らかにすることが可能であると考えからである。

3. 研究の方法

本研究課題は3年間で4期に区分して実施した。研究計画全体では、平成21年度～22年度前半期が文献調査を集中的に行う基礎作業期間となり、22年度後半期～23年度が表現受容の実態把握と特質解明のための展開期間と位置づけた。

以下、主要な研究事項を年度毎に述べる。

【平成21年度[前期]】：敦煌書儀の本文校訂と『高野雑筆集』語彙集成の補訂

(1) 敦煌書儀本文の校訂作業

研究計画初年度では、その前期を中心にして敦煌書儀本文の校訂作業を行った。これまで基礎的作業を通して、敦煌書儀のなかでも比較的写本数が少ない「朋友書儀」については写本間での校訂を終了しているが、膨大な数の「吉凶書儀」については作業が進展していない。したがって「吉凶書儀」の主要写本を用いて校訂作業を進めた。作業では写本のみならず、那波利貞の校訂本文

(『元和新定書儀』と杜有晋の編する『吉凶書儀』とに就いて)1962)をも参照した。この作業が敦煌書儀の語彙集成作成の基礎資料となった。

(2) (仮称)「『高野雑筆集』語彙集成」の補訂

上記(1)と並行して、これまでの研究補助金によって作業を展開してきた『高野雑筆集』語彙集成の補訂作業を行った。各種校訂本文との異同確認と異体字の調整を主な作業内容として、語彙集成の完成度を高めた。この作業は引き続き遂行する奈良朝の書簡表現集成の指標ともなった。

【平成21年度[後期]】：敦煌書儀語彙集成のための語彙調査と奈良朝書簡語彙集成の語彙調査

(3) 敦煌書儀語彙集成作成に向けた語彙の検討

研究計画初年度の後半期では、まず敦煌書儀の語彙集成作成に向けての語彙の検討を行った。近年、中国では書儀表現を研究対象とした成果(呉麗娉『唐礼摭遺—中古書儀研究』2002、王啓濤『吐魯番出土文書詞語考釈』2005、張小豔『敦煌書儀語言研究』2007)が出され、それらを受けて書儀語の候補一覧を作成した。作業に際しては、張小豔『敦煌書儀語言研究』巻末の語彙索引を随時参照した。

(4) 奈良朝書簡語彙集成作成に向けての語彙検討

上記(3)と並行して、奈良朝書簡語彙の収集を行う。使用史料は正倉院文書・出土木簡等と『萬葉集』の2つに大別される。

前者の収集では、丸山裕美子の成果(『書儀の受容について—正倉院文書にみる「書儀の世界」—』1996他)で

示された書式や語彙に基づきながら、西澤奈津子の成果(基盤研究(C)「日本古代における書状の社会機能に関する研究」2003-2006)をも援用して語彙の検討を行う。それらの抽出語彙の正倉院文書での出現状況や出土木簡の状況把握には公開データベースを活用する(正倉院文書等は「SOMODA」と「奈良時代古文書フルテキストDB」「平安遺文フルテキストDB」を用い、木簡は奈良文化財研究所作成DBを用いる)。

後者の『萬葉集』では、漢語表現や漢語の出典に特徴がある『新編日本古典文学全集 萬葉集』(小学館)と『新日本古典文学大系 萬葉集』(岩波書店)の注で指摘されている書簡表現を中心に抽出し、関連論文の考察(山崎福之「萬葉集漢語考証補正(1)～(3)」2005～2007等)をも加味して『萬葉集』書簡表現語彙集成素案を作成する。

【平成22年度】：基礎資料作成の検討と使用史料の実態把握

(5) 敦煌書儀語彙集成素案と校訂本文との照合

前年度の基礎資料作成を継続して敦煌書儀語彙集成素案と校訂を終えた「吉凶書儀」本文との照合を行う。書儀の語彙は口語性が強いことから、照合作業では語彙の性格を判断するための基準に松尾良樹の「口語語彙索引」(基盤研究(C)「敦煌文書・トルファン文書・正倉院文書の比較写本学」2000-2002)での掲出状況を参照して進める。

(6) 奈良朝書簡語彙集成の検討と素案統合作業

(5)と同じく、前年度の基礎作業を継続して、奈良・平安初期の書簡表現と収集された語彙の検討を行う。正倉院文書・出土木簡と『萬葉集』での結果を比較検討し、特徴的な語彙や表現の検討を深める。なお、正倉院文書については、この段階で『大日本古文書』『正倉院古文書影印集成』を用いて本文確認をあわせて行う。

以上の作業は、本研究課題の表現受容の考察をおこなう上で最も重要な基礎作業にあたるため、十分な作業期間を設ける必要がある。そのため平成21年度から平成22年度前半期の長期に渡る研究期間をあてる。

(7) 敦煌書儀の実見調査と最新研究成果の収集

上記の基礎作業の多くは、近年の中国における書儀研究の成果に負っているのが現状である。そのような状況から、現地研究者との情報交換並びに最新成果の獲得は研究課題遂行上極めて重要である。また北京図書館所蔵の敦煌文書には未だ公刊されていない書儀類も多く、実際に現地で書儀を実見調査する必要がある。特に「吉凶書儀」については北京図書館所蔵文書との校訂を必要とする文書が存する。

中国での情報収集・意見交換は、書儀研究の趙和平氏(北京理工大学教授)と日中の古代文学研究を専門とする呂莉氏(中国社会科学院外国文学研究所助教授)他を予定している。

【平成 23 年度】：奈良・平安初期の書簡表現の比較検討と史的展開の様相把握

(8) 敦煌書儀の書簡表現と奈良・平安初期の書簡表現との比較検討

これまでの基礎作業で進めてきた語彙集成と中国での書儀研究の情報や最新成果を踏まえて奈良・平安初期の書簡表現受容の様相把握を行う。敦煌書儀表現との類似のみならず相違にも着目する。表現受容には時間差が生じ、中国文献との間には数十年のズレが認められる。これが史的展開にかなる影響を与えているのかに留意することで、奈良・平安初期の書簡表現の特質と史的展開の様相が浮き彫りになる。

(9) 書簡表現から見る「国風暗黒時代」の文学様相把握

書簡表現受容の観点から奈良・平安初期に亘る「国風暗黒時代」の文学状況の一端を解明する。

4. 研究成果

研究期間全体に解明し得た成果内容について、以下箇条書きで示す。

(1) 「『高野雑筆集』語彙集成」(仮称)の補訂

空海書簡の本文研究(太田次男「高山寺旧藏本高野雑筆集平安末鈔本について」1984、高木神元『空海と最澄の手紙』1999)を踏まえて作成した校訂本文に基づいて抽出した語彙の補訂作業をすべて終えることができた。また、空海の書簡語彙集成を基準として最澄書簡(最澄消息)と円仁(入唐求法巡礼行記)の語彙集成も抽出まで作業を終えた。これによって平安初期における書簡表現の傾向把握をおこなう基礎資料を整えることが可能になった。

(2) 奈良朝後期の書簡表現の抽出と集成

正倉院文書に見られる書簡表現の抽出と『萬葉集』の歌・題詞・左注等の書簡表現の抽出を行った。前者では本文のデータベース化が進んでおり、研究課題遂行にあたり有効に活用できた。後者は近時の注釈で漢語表現に着目した成果が報告されており、研究成果を盛り込むことができた。

(3) 敦煌書儀の書簡語彙集成

敦煌書儀の表現から書簡関係語彙を抽出する。研究の進展によって文書語彙に関する研究成果(王啓濤『吐魯番出土文書詞語考釈』2005、張小豔『敦煌書儀語言研究』2007等)が刊行され、これらで取り上げられている書簡語彙に基づいて集成と検討を行った。

(4) 表現受容の観点による書簡表現の比較検討と特質の解明

以上の基礎作業を踏まえて、奈良・平安初期の書簡表現が敦煌書儀の表現をどのように受容し、内化・深化しているかの一端を明らかにした。検討の過程では、同一語でも敦煌書儀の用法と一致するか否かにも留意して作業を進めた。また受容研究の立場から、書簡表現に影響を与えている中国書簡表現の実態を踏まえることができた。なお、敦煌書儀の研究は本文校訂や制度史研究に主眼があり、表現研究としては未だ十分な成熟を見せていない。この状況を打破するために、語彙集成を作成して敦煌書儀と尺牘に共通する特質を明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 西一夫, 『伊勢物語』教材研究—「初冠」試解—, 信州国語教育, 第 82 巻, 100-103, 2011, 査読無
- ② 西一夫, いま求められる「漢字力」とは何かを問う, 月刊国語教育研究, 第 475 号, 48-48, 2011, 査読無
- ③ 西一夫, 大伴家持の詩文表現受容—歌と左注—, 2010 和漢比較文学検討会論文集, 43-50, 2010, 査読無
- ④ 西一夫, 書儀・尺牘の受容—起筆・擱筆表現を中心に—, 萬葉集研究, 第 30 集, 171-203, 2009, 査読無
- ⑤ 西一夫, 大伴家持の詩的表現受容・素描—越中国守の作品から—, 研究紀要(長野県国語国文学会), 第 8 巻, 1-5, 2009, 査読無

[学会発表] (計 3 件)

- ① 西一夫, 書儀・尺牘表現の受容—平安初期漢文書簡の表現を中心に—, 第 30 回和漢比較文学学会大会, 2011. 9. 25, 茨城
- ② 西一夫, 萬葉集の漢語表現—大伴家持の「挽歌一首」—, 長野県国語国文学会, 2010. 11. 27, 長野
- ③ 西一夫, 大伴家持の詩文表現受容—歌と左注—, 和漢比較文学学会第 3 回特別研究発表会, 2010. 9. 3, 台湾

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西 一夫 (NISHI KAZUO)
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：20422701

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし